

技術士への道 Vol.9

2012/5/13

H23 農業部門(農村環境) 専門レビュー

農村環境分野は受験生が少ないせいか、関係する文献が殆ど市販されていない。合格者も全国で十数名であることから各県に1名も居ないこととなる。従って、周りから情報を調達することは殆ど不可能、ネットの検索でももちろんヒットしない。

今回から、少数受検者の分野の少しでも手助けとなるよう、「少数受検者」シリーズを連載したい。なお、回答案に骨子法を取り入れて、読みやすさ、整理のしやすさに配慮した。

1、問題

環境保全型農業の取り組みによる農村環境の保全
について課題を3つ以上挙げ、解決策についてあなたの考えを挙げよ。

2、回答案

1) 考察

近年は持続可能な農業を展開するためには、環境保全型農業が重要であることを、白書及び基本計画で謳っている。そのためには、土づくりや農薬低減を通じた、農業の持つ自然循環機能を活かすことが重要と説いている。

しかし、これらを展開するにしても、非常にコストがかかる農業となり、農業経営が持続しないことには本末転倒であろう。それにはやはり人材や儲かって経営が成り立つようにすることは必須である。

2) 骨子案

上記の考察を基に、1)持続可能な生産方式の導入、2)人づくり、3)持続可能な経営、の視点で体系化し整理することとした。なお、参考データは、農業農村白書、農業農村基本計画、各地方農政局及び環境省ホームページから得た。

持続可能な生産方式の導入

現 状	課 題	解 決 策
現場では大量の農薬、化学肥料→ 土の酸性化や、土の持つ回復力の減退→ 自然循環機能の低下→ 土力の低下による収量等の減	持続可能な生産方式の導入のためには 問題点→土壌の性質に由来する農地の 生産力の維持増進が必要。 →科学的な根拠に基づく生産へ誘引でき なかったのがボトルネック。	方向性:自然循環機能を利用した土づくり →具体策:土壌診断に基づく施肥量の適正化、局所施肥、肥効調整型肥料の利用等施肥技術の高度化促進。緑肥作物の利用促進、など 方向性:農薬使用の低減 →具体策:IPM(総合的病害虫管理)を導入し、経済性を考慮しつつ、適切な手段を総合的に講じる取組を推進。

人づくり

現 状	課 題	解 決 策
<p>現場では生産に終われ環境保全型農業が重要と知りつつも手がけることが出来な ↓ 環境保全型農業を志す人材が育たない。</p>	<p>人づくり 問題点→学習意欲を高めるためのインセンティブを如何にして付与するかが必要。 →制度があるにも関わらず利用できていなかったのがボトルネック。</p>	<p>方向性:公的な支援制度の活用。 →具体策:エコファーマー支援制度を活用した人材づくりを導入すべき。当制度を活用することで、環境保全型農業への理解が深まり、ひいては人材育成へと繋がる。さらに現行支援制度を充実させくことで、多くの参加者が見込める。</p>

持続可能な経営

現 状	課 題	解 決 策
<p>環境保全型農業に取り組みたいと思いつつも収益につながるのか不安。 ↓ 生産性確保には、従来からの化学合成肥料や農薬に頼る農業経営にならざるを得</p>	<p>持続可能な経営＝収益の確保 問題点→消費者ニーズを捉えた需要の喚起が必要。→様々な情報供給体制を利用するアイデアを思いつかなかったのがボトルネック。</p>	<p>方向性:直販所やマスメディア、公的な広報媒体の活用。 →具体策:近年急速に利用者が増えている直販所を活用した広報。また、ネットや各自治体広報誌による積極的な情報の提供を展開すべき。また、増加傾向にある中食、外食ニーズに対応した環境保全型農産物メニューの開発を行えば相乗効果が期待でき、需要の喚</p>

(答案解説)

「～が必要。から〇〇がボトルネックとなる。」と繋げることにより、唐突な解決策の論旨にならないようにすることです。